

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 5 月 30 日現在

機関番号：37406

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010～2012

課題番号：22730570

研究課題名（和文） 心的境界の研究 ―臨床群と芸術家群の比較から―

研究課題名（英文） Research on boundaries in the mind: comparison between clinical patients and artists

研究代表者

児玉 恵美（KODAMA EMI）

九州ルーテル学院大学 人文学部 准教授

研究者番号：80435156

研究成果の概要（和文）：

心的境界について、1) 臨床群も芸術家群もともに、目に見えるものに対してはきっちりと境界を設定しようとする、2) 臨床群は物事を捉える際にその境界を曖昧にせずより明確に区別しようとするが、一方芸術家群は曖昧な状態をそのまま受け入れられることが示された。また芸術家は、自己の内的世界―外的世界が繋がりがやすく、必要に応じてそれをうまくコントロールできること、自己の内的世界を社会に受け入れられる形で表現し、そのことで外的世界と繋がることができることが示唆された。

研究成果の概要（英文）：

As for boundaries in the mind, the result shows 1) Clinical patients and artists tend to set boundaries on visible objects. 2) Clinical patients try to define boundaries more clearly as they have less tolerance for ambiguous states, in contrast to artists who can accept ambiguity. It was further suggested that artists' inner and outer world are easily connected and the boundaries can be controlled if necessary. Moreover, it was also suggested that artists can communicate with the outer world by representing their inner world in the socially accepted form of art.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
22年度	500,000	150,000	650,000
23年度	500,000	150,000	650,000
24年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	1,500,000	450,000	1,950,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・臨床心理学

キーワード：臨床心理学、心的境界、精神病理、芸術、創造性

1. 研究開始当初の背景

些細な刺激に対し非常に敏感に反応する

人もいれば、あらゆる刺激に対し比較的動かない人もいる。また、たとえ同じ出来事に遭

遇したとしても、個人や状況によって、受ける衝撃やその後への影響の強さは異なる。このような、個人の事物や思考・感情に対する体験の仕方、距離感、刺激の出入りを考える一つのアプローチとして、「境界 (boundary)」の概念が有用である。

境界という言葉を用いて人格を説明する試みは、多くの心理的現象、とりわけ精神病の状態を理解する上で欠くことが出来ないものとして発展してきた (Federn, 1952)。これまで境界が薄く透過的であることは、例えば統合失調症にみられる幻覚や妄想、思考奪取などと関連づけられ、精神病理や他の病理状態を引き起こす自我の欠損や脆弱性を表す文脈で用いられてきた歴史がある (馬場, 1967 など)。

Hartmann (1991) は、悪夢に悩まされる人たちを観察し治療していく中で、さまざまなものやことが一斉に溢れ出し、それらを区別するためのバリアや壁が薄いという彼らに共通する特徴から、彼らを “thin boundaries (境界の薄い人)” と名付けた。そして、心的境界に thick boundary (厚い境界) と thin boundary (薄い境界) を想定し、さまざまな心的境界を測定する尺度 “Boundary Questionnaire” を作成している。ここで Hartmann は、私たちの周りにはさまざまな境界が存在するが、境界とは自然に表れたものではなく、私たちの心の中で区切り、分類することで作られるのだと述べ、これらの境界について “boundary in the mind” (心的境界) と説明している。そして、一個人の中で時と場合に応じて境界の在り方が変化し、その程度やバランスにより、境界の薄いことが精神病的なものや、他方で芸術・創造性と結びつくのだと述べている (Hartmann, 1991)。この考えに基づき調査を行った児玉 (2006) も、境界が透過的であることが自我の脆弱性だけでなく、創造的な面にも関与している可能性を示唆している。これらから、創造的な人や芸術に携わる人は、共感性や感受性が強く、外界からの刺激を取り入れやすいことや、現実と非現実の世界が繋がりがやすいことなどが推測される。そしてこのことが、創作活動における創造性の発揮にも大きく影響していることが考えられる。

これまで本邦においてはまだ、Hartmann の考えを援用した心的境界に関する研究は行われていない。また、境界の薄さや透過性の病理的な側面だけでなく、肯定的な側面について積極的に検討した研究は数少ない。今後、心的境界がどのように病理的側面に関わっているかが具体的にわかると、臨床現場におけるクライアントの特性や現状の困難さを理解することを助け、さらに心理面接を促進させる新たな援助の在り方を提案しうると考える。また、心的境界がどのように創造的

側面に関わっているかがわかると、芸術や創造性に関し、これまでとは違った独自の論を発展させ、その知見をまた臨床現場にも還元できるのではないかと考える。

2. 研究の目的

精神病理を抱えた人も、創造的な芸術家も、ともに「境界の薄い人たち」であるとしたら、その両者の違いはどこにあるのだろうか。本研究では、臨床群と芸術家群を対象に調査を行い、この両者の相違について検討することを目的とした。なお本研究の臨床群として、統合失調症患者 (以下 Sc 群) とうつ病患者 (以下 D 群) を調査対象とした。Sc 群は、無意識的内容が自我に侵入してきたり、外的現実と自己との間も混同されやすいために、幻覚や妄想などが体験され (前田, 1985)、境界の薄いことが病理的に結びついていると考えられるためである。一方 D 群は、強迫的で几帳面、完全完璧欲求の高いことが病前性格としてあげられ、ある側面において物事の境界をきっちり明確にする指向性が高いと考えられるためである。具体的には次のような目的を設定した。

(1) 心的境界を測定する尺度を、臨床群と芸術家群に施行し、その得点を一般の健常群の得点と比較することで、各々の心的境界の構造 (厚さ/薄さ) を量的に検討する。そして、臨床群と芸術家群にみられるさまざまな境界のバランスの違いから各群の特徴を把握する。

(2) 臨床群と芸術家群の面接調査を行い、両者の心的境界の構造を質的に検討する。そして、芸術家の創作活動における創造性の発揮について、境界の観点から考察する。また併せて、創作活動に関わる心の働きを知るための心理検査を実施する。

3. 研究の方法

上記に記載した研究目的に添って、次の方法で研究を行った。

(1) 心的境界の量的検討

① 調査対象者：健常群として一般大学生 460 名、臨床群として精神科外来に通院している患者 52 名 (Sc 群 31 名、D 群 21 名)、芸術家群として大学の芸術学部に通う学生 99 名 (美術専攻 21 名、デザイン専攻 59 名、写真専攻 19 名)。

② 測定尺度： 心的境界を測定するものとして、Hartmann (1991) 作成の境界尺度の日本版 (児玉作成) を使用した。この尺度は、得点が高いほど境界が薄いことを示す。

③手続き：健常群、芸術家群には集団で大学の講義室にて実施した。また臨床群には、病院の一室で一人ずつ実施した。その後尺度全体の得点と各因子得点を算出し、分散分析によって健常群、臨床群の Sc 群・D 群、芸術家群の得点を比較した。

なお臨床群については、調査実施に関する通常の倫理的配慮に加え、主治医と現在の病状を検討後、調査参加可能と判断された者を選定し、希望があれば調査終了後に主治医と相談の上、個別に結果を報告するなど特別な配慮を行った。

(2) 心的境界の質的検討

当初は、臨床群と芸術家群両方の面接調査を行いまとめる予定だったが、現在は芸術家群の実施までに留まっている。

①調査対象者：国内で活躍している芸術家 3 名（映画監督 1 名、画家 2 名）。なお調査対象となる芸術家を選考する際には、プロとして創作活動を行っており、それを生業としていることを条件とした。

②手続き：個室にて、1 名ずつ個別に半構造化面接調査を行った。面接では、創作活動の源泉や、作品が生み出される瞬間、創作中とその後の心の変化などを尋ねた。発話内容は許可を得て全て IC レコーダーにて録音した。その後一人ずつ全ての発話を逐語化して各テキストを作成後、心的境界の側面から、創造性の発揮過程についてテキストの文脈を崩さない形でカテゴリー化した。

また、面接調査終了後、心理検査（ロールシャッハ・テスト）を実施した。ローデータは片口法に基づきスコアリングした。

4. 研究成果

(1) 心的境界の量的検討

日本版境界尺度の得点を分散分析により健常群、臨床群（Sc 群、D 群）、芸術家群とで比較した結果、「境界の脆さ」（ $F=6.67, P<.001$ ）、「明確な境界を嫌うこと」（ $F=16.03, P<.001$ ）、「曖昧な境界への意識」（ $F=5.74, P<.001$ ）、「大人と子どもの連続性」（ $F=4.63, P<.001$ ）、「境界設定のこだわらなさ」（ $F=0.51, P<.001$ ）の各因子、および日本版境界尺度全体（ $F=5.86, P<.001$ ）で統計的に有意な差がみられた。そのため、続けて Bonferroni による多重比較を行った。

各群にみられた主な特徴を、臨床群の Sc 群・D 群、芸術家群の順に記載する。

①Sc 群の特徴：健常群に比べ、物事を捉えるときに、より白黒はっきり区別しようとする、自分を越えて自分の存在や意識の境界が広がること、大人と子どもの関係の連続性を大切にしようとする、境界の設定に

こだわる傾向が示された。

②D 群の特徴：健常群に比べ、物事を捉えるときに、より白黒はっきり区別しようとする、境界の設定にこだわる傾向が示された。

③芸術家群の特徴：各々の専攻別（美術、デザイン、写真）に分析したところ、統計的に有意な差が見られなかったため、全てをまとめて芸術家群としその後の分析を行った。

境界尺度全体において、その得点が Sc 群、D 群よりも有意に高かった。また、健常群よりも、自分を守る境界が侵襲的に脅かされる感覚を携えており、Sc 群よりも境界の曖昧さを意識しながらそれを受け入れられること、健常群よりも境界の設定にこだわる傾向があることなどが示された。

これらの結果から、臨床群である Sc 群・D 群、芸術家群ともに、目に見える物については、きっちりと境界を設定しようとする共通点が見られた。また、Sc 群と D 群は、物事を捉えるときに、その境界を白黒はっきり明確に区別しようとするが、一方で芸術家群は、全体的に境界が薄く、時に侵襲的に感じながらも、境界の曖昧さを受け入れることができるという相違点が見られた。

(2) 心的境界の質的検討

①芸術家の面接調査の分析

芸術家 3 名の平均面接時間は 1 時間 27 分であった。調査対象者のうち、最初に行った 1 名のテキストから、分析テーマと関連する箇所に注目し、それを概念生成の元とした。その後、順次芸術家 2 名のテキストを加え、必要であれば新たに概念を生成し加えていった。生成された概念は、概念同士でまとめカテゴリー化することを繰り返した。

これまでに面接調査が実施できた対象者数が限られているため、未だ芸術家の全体像を捉えるまでには至っていないが、現在までにカテゴリー化されたものとして、「感情体験の受け止め方」、「客観視の作業」、「リサーチや観察」、「現実世界との繋がり」、「創作の意義」などが挙げられる。各カテゴリーとそこに含まれる概念について、主なものを記述する。

<感情体験の受け止め方>

- ・自分の感情体験がアイデアの核になる
- ・自分や他人の感情に敏感
- ・影響を受けやすい
- ・さまざまな感情があることを認識している
- ・さまざまな感情があることを許容出来なければ狂ってしまう
- ・ポジティブな面と同様にネガティブな面も必要
- ・ネガティブな感情を表現できる場が必要
- ・ネガティブな感情や感覚に対して寛容でお

もしろがれる

- ・感情を創作過程で排泄するのは気持ちのよいこと
- ・作品は気持ちにリンクしている

<客観視の作業>

- ・自分の内面を客観化し、置き換えて一般化させる
- ・作品を一旦置いて考える
- ・感情に動かされて作った作品を、冷静な自分が見て折り合いをつける
- ・時間をかけて制作することで説得力が増す
- ・実生活の中で体験しながら同時にそれを客観視している

<リサーチや観察>

- ・作品づくりは地道なりサーチや世の中の観察が必要

<現実世界との繋がり>

- ・ネガティブな感情を作品化することで社会と共有させる
- ・他者の目を意識して作品作りを行っている
- ・自分の内面と対社会的なところでのバランスが大事
- ・作品を世に出す過程で閉ざした世界から現実的な世界へ出て行くことができる

<創作の意義>

- ・作品で吐き出して昇華させる
- ・創作活動を通して自分を受け入れられる

②芸術家の心理検査の分析

芸術家3名のロールシャッハ・テストに共通して見られる特徴として、知的生産性や知的機敏性が高いこと、自分に対する要求水準が高いこと、感情的に豊かであること、時に現実からの逃避を示すこと、濃淡や陰影を用いた反応が多いこと、直接的に自己愛が昇華された反応が多いこと、などが挙げられた。

以上より、心的境界の観点から、芸術家は、自他の感情に敏感で、さまざまなことから影響を受けやすいなど、内的世界—外的世界の境界が薄いという特徴を携えながらも、冷静さや客観性を持ち合わせており必要に応じて境界の厚さをコントロールできること、事象や感覚などに対する境界の曖昧さに耐えられる能力を有しておりそれを楽しめること、自分の内的世界を社会に受け入れられる形で表現することができ、そのことで積極的に社会とつながることが目指されていることが考えられた。

(4)今後の展望

臨床群と芸術家群の心的境界の在り方を量的・質的に比較した本研究を通して、心的境界が創造性の発揮にかかわる際には、境界の曖昧さを意識しながらもそれを受け入れられること、必要に応じて境界の厚さをコントロールできることなどが関係していると

考えられた。他方、心的境界と病的側面との関係については明確な論考までには至らなかった。今後、臨床群と芸術家群の対象者をさらに増やし調査を引き続き行って行く予定である。そして、得られた知見を、実際の現場にいかにも還元していけるか、臨床群における事例研究を通して検討していくことも必要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計2件)

①児玉恵美, 日本版境界尺度 (JBQ) の作成および精神病理・創造性との関連の検討, 応用障害心理学研究, 査読有, 第12号, 2013, 印刷中.

②児玉恵美, 「境界」概念のこれまでとこれから, 応用障害心理学研究, 査読有, 第10号, 2011, 61—68.

〔学会発表〕(計1件)

①児玉恵美, GIDの心理特性—MMPIの結果から—, GID学会, 2011年6月5日, 東京ゲートシティ大崎.

〔図書〕(計1件)

①児玉恵美, 精神力動的心理療法における情動焦点型技法について, R. A. レヴィ, J. S. アブロン (編著), 安達圭一郎・石山貴章・久崎孝浩 (編訳), エビデンスベースト精神力動的心理療法ハンドブック 科学と臨床実践をつなぐ試み, 北大路書房, 2012, 193-211. Handbook of Evidence-Based Psychodynamic Psychotherapy: Bridging the Gap Between Science and Practice, R. A. Levy & J. S. Ablon (Eds), Human Press, 2009.

〔産業財産権〕

○出願状況 (計0件)

○取得状況 (計0件)

〔その他〕

ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

児玉 恵美 (KODAMA EMI)

九州ルーテル学院大学・人文学部・准教授
研究者番号: 80435156

(2) 研究分担者 なし

(3) 連携研究者 なし